

## 函館ワンニャン物語 ④ ～シンバ～

### ◆S動物病院

先生「これはひどい。何てことを。」

犬の様子を見ながら、すばやく治療に取り掛かる。

代表「先生、どうなのでしょう。」

治療の様子を見ながら、震える声で尋ねる。

先生「傷口に細菌が入り込んでいるので、化膿する可能性があります。体もかなり弱っています。それとフィラリア症で、内科的にも無理ができない状態ですね。」

代表「S先生、助かりますか。」

先生「少し厳しいかもしれませんが。」

レスキューメンバーが見守る中、静かに治療が続く  
ここにいる全員が、名も知らぬこの犬の命が、助かることを心から祈っている。

### ◆アニマルレスキュー犬舎

首にロープを巻きつけられ保護された犬（シンバ）  
が、静かに眠っている。代表とメンバーがその様子  
を、優しく見守っている。

代表「よかった。元気になったね。」

ナレーターにより次の記事が詠まれる。

(「北海道新聞」より)

◀ 地道に動物の保護活動続ける函館アニマルレスキューの取り組みに感動を覚え幾度となく取材に通った。

中でも今年7月末、首をロープでぐるぐる巻きにされた犬の取材が強く印象に残っている。

この犬が保護された直後、市内の動物病院で診てもらうために順番待ちをしているところに駆け付けた犬は傷口からウジがわき、悪臭を放っていたため、メンバーの車の中で待機していた。

血をにじませてうずくまっている犬の姿を見た瞬間、涙が込み上げた。

すぐにデスクに連絡し、紙面を開けてもらった。

この犬は獣医師の懸命な治療で命をつなぎ止め順調に回復。

「シンバ」と名付けられ9月に退院することができた。

人を怖がるなどの特殊な事情から、同団体が引き続き世話をしている。

シンバは人への恐怖が抜ききれないのか、その後の取材で足を運ぶ自分にも低いうなり声をあげる。

しかし、その横で餌を与えているメンバーには心を開き、尾をぶんぶん振って甘えている。

人間の愛情を知り、心を開き始めた姿にうれしさと切なさを感じる。

幸せになってほしい」 ▶

◆ 函館市総合福祉センター（譲渡会）

アニマルレスキューで保護している犬と猫の譲渡会が函館保健所と協力して開催される。

洋一も聖子と一緒に、自分たちで保護し育てていた子猫5匹を連れ、ボランティアに参加する。

洋一「代表さん、今日一日よろしくお願ひします。今日

は家のやつも一緒に来ました。お世話になります。」

聖子「よろしく、お願いします。」

二人で、代表に向かいお辞儀をする。

代表「こちらこそ、お世話になります。よろしく、お願いします。」

洋一と聖子も、集まったレスキューのメンバーと一緒に、慌ただしく準備に取り掛かる。

やがて、譲渡会が始まる。

洋一が連れてきた子猫5匹はすべて新しい飼い主に引き取られていく。

#### ◆自家用車内（宅途中）

後部座席に、空になった子猫を入れてきたゲージがある。

二人に会話は無い。

聖子はぼんやりと外を見ている。

頬に涙が伝わる。

洋一「辛いよな。わかっているつもりなんだけど……。」

聖子は何も言わない。

洋一「何だろう。この寂しさは。二か月しか一緒にいなかったけど……。もらわれて行った家がかわいがられ、幸せになってくれることを信じるしかないよな。」

聖子「もし、かわいそうな飼い方をしているのなら、取

り返してくる。」

その言葉を耳にした洋一は強くなづき、確かめるように言う。

洋一「何日か経ったら、様子を見に行こう。もしその時この人の飼い方はダメだと思ったら、二人で取り返してこよう。家より幸せに飼ってもらえないなら、取り返してあげればいい。」

いつのまにか、洋一の目にも涙があふれている。

(「函館ワンニャン物語 ⑤」へ続く・・・)